
人であるか 人でなしか

木野目理兵衛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人であるか 人でなしか

【Nコード】

N7438F

【作者名】

木野目理兵衛

【あらすじ】

ある男の元を訪れた義体職人は言う。貴方は人形だと。だが、果たして本当に？

「ねえ貴方、貴方宛の手紙が来てるわよ」

そんな妻の声が聞こえて来たのは、一週間程前の昼過ぎ位だったね。

丁度その時、僕は書斎に居て、たっぷり食した昼食をこなしつつ、ゆったりと安楽椅子に座りながら一服していた所だった。男ならば非解ってくれると思うけど、何かに浸っている時に、急に揺り動かされるのはとても気分が悪いんだ。殊に、新聞を読んでいる時と、煙草を吞んでいる時は、特に。

だから僕は無視を決め込んだ。妻の甲高い叫びは良く響くから、しつかり耳に届いていたけどね。聞こえていないふりをして、椅子にもたれていたら、突然ドアが開いて、彼女が入って来たんだ。

「貴方、貴方ったら、また聞こえないふり？ 手紙が届いているんだってば」

長年付き合つて来た仲だからか、或いはこれが女の勘という奴だろうとか、ともあれ、彼女にはお見通しだったよ。参ったね。それで、今度は実力行使と来たものだから、僕は仕方が無く立ち上がった。「解った解った、ちゃんと聞こえてる、で、一体全体手紙が何だというんだ？」

「ただの手紙でしたら貴方の手も煩わせないわよ、ついでに耳も、ね。これを見てよ」

そう言つて妻は乱暴に便箋を差し出して来た。そいつに目を通し、彼女が慌てた理由が解ったね。その手紙には、聞いた事も無い様な会社の名前が書いてあつたのだから。

「『ハール&イドウナ人形製造会社』？ いや、知らない名だ。間違いないのかい？」

「もう、言つたじゃない、貴方宛の手紙だって。ほらそこ、貴方の名前がちゃんと書いてあるでしょ？ 耳は大丈夫？ 案外、この何

とか言う所で義耳でも作つて貰つた方がいいんじゃないの？ 人形
つて言うんだから、きつとそういう会社だと私は思うんだけど」

常に辛辣な、だが今回は取り分けその気が強い妻へ僕はむつとし
たけれど、彼女の言う事には一理ある。

知つての通りここ土壱^{ドイツ}という国は機械仕掛けが大好きで、最近じ
やそれが病的、狂的な域に達している。人の体から、何と脳まで、
つまり殆ど人間そっくりに動く人形まで造つてしまふのだからな。
神をも恐れぬ豪胆さにはほとほと恐れ入る限りだよ。義体大国と呼
ばれて職人連中は鼻高々なんだろうがさ。

だから妻が言う様に、この人形製造会社というのもその類のもの
だろう。僕自身そう考えた。さあ弱つた、厄介な齒車轟負がとうと
うこのミュンヘンにまでやって来たのか、と。

しかし、僕が考えたのはそれだけだった。どれだけ言われようが、
その会社に覚え等無かつたからだ。そんな所と関わり合いになつた
所で何か良い事があるとは思えない。下手に反応を示せば、何か七
面倒臭い事に巻き込まれるに決まつている。そう感じた僕は、手紙
を暖炉の元まで持つて行くと、赤々と火が灯るそこに、ぱつと手紙
を投げ入れたのさ。

「ちよつと貴方何するのよ、まだ封も切つてないのに！」

妻の抗議の声が上がつたが、僕は構わなかつた。

そうやって叫べば叫ぶ程、僕の神経は苛立ち、余計に止めるとい
う選択が遠のいていったよ。

「何、どうせ融資やら何やらの催促か、で無ければ性質の悪い悪戯
だよ。構う事なんてないさ」

僕はそう応えたと、火掻き棒を使って便箋が完全な灰になるまで
熱心に突いた。妻は最初こそ不服そうだったけれど、しかし即座に
僕の言つた通りと解つて、書斎から出て行つたつけな。

そうして僕はすっかりその手紙の事を忘れていた。すっかりだ。
当然だろう。あんなものをずっと気にかけている方がどうかしてい
る。誰だって、道端に落ちている広告の内容を何時までも覚えては

いまい。

けれども、『忘れていた』と言った様に、思い出さなくてはならない事が起きてしまったのさ。

今日の昼過ぎの事だよ、僕の家に来たのは。まだ二十歳になるかならずやの青年だった。突然の訪問に妻は不機嫌だったが、彼は物腰丁寧で、服装もしっかりとしていて、僕はなかなか好ましい印象を受けたものさ。まあ、直ぐにそいつは撤回される事になったけどね。

何故だつて？ その好青年はこう言ったのさ、人懐っこそうな笑みを浮かべて。

「始めまして、『ハール&イドウナ人形製造会社』から来ました、キークと申します。先日ご連絡した通り、御主人の耐久年齢がもう間も無くて過ぎようとしているので、点検及び修理にやってきました」

初対面の人間に行き成りそう言われたら、どう思う？ 良い気分はしないだろう？ しかも、一週間前に出て来た胡散臭い名前の会社より来た、なんて名乗られたら、ねえ？

僕もそうだった。そして、妻もだ。僕等はぽかんと口を半開きにして互いを見合った後、キークと名乗った青年の方を向いた。彼が正真正銘に正気であるかを確かめる為に。

面白い事に、キークの方も、同じ様な顔をしていたよ。この人達は一切何を疑っているのだろうか、と。その表情に、妻は兎も角、僕は青年が本気でそんな事を言っているのだと確信したね。

だから僕は尋ねた。咳払い一つして自分を落ち着けてから、

「失礼だけれど、意味が良く解らなかった。手紙は……読む前にこちらの手違いで無くしてしまつてね。だから聞くが、御主人とは僕の事か？ 耐久年齢だの修理だの部品交換だのは何の事だい？」

そう言つと、キークはますます怪訝そうな顔になったが、それでもしっかり質問に応えてくれた。

「手紙を無くした？ 嗚呼、道理でこちらの話が伝わっていないと

思いました。まあ、いいですけど……ええっと、大分人工頭脳が危うくなっているみたいだから改めて言いますけれど、はい、御主人とは他ならぬ貴方の事です。貴方は、弊社が設計、販売している義体人形であり、記録によれば、十年前に御両親の依頼によって作成されておりまして、これは弊社が造っている義体が機能を真つ当に保てる、ぎりぎりの歳月でもあります。付きましては何処の、どの部分が、どれ程に老朽化しているかを確かめ、然る後に部品の交換等を行なう為、義体職人である私が訪ねる事となったのです」

説明完了。彼はそこまで言い終えると、満足した様に、或いはそう問い返す様に、微笑んで見せた。

が、こちらとしてはますます混乱するより他ならなかったがね。さつきまでは曖昧なままだった言葉が、はつきりと定義される事となったのだから。僕が人形だって？ 冗談も甚だしい！

ただ言われて見ると、成る程、と思う所が多々あった。

例えば、僕には幼い頃の記憶が乏しい。大抵の人間がこの年になれば忘れるものかもしれないが、それでも少ないと思うね。その上覚えているのも多くが伝聞の形だから、怪しいと言えば怪しい。

それから十年前とキー口は言ったが、それは僕が事故に巻き込まれた年でもあったのさ。道を歩いていたら、酔っ払い馬車が突っ込んで来てね、一歩間違えば死んでいたと、医者から聞かされたよ。嗚呼、うん、そう、聞かされた、なんだ。その時の僕は木乃伊の様な姿でベッドに横たわっていて、ろくに身動きも取れなかった。両親に鏡を見せられて、漸くどれだけ酷い怪我だったか知った位さ。

だから、もしかしたら、この義体職人と称する青年が言う事は、正しいのかもしれない。僕は、本当は十年前の事故で死んでいて、今の僕は、死んだ僕に似せて造られた人形では無いか。両親はもう亡くなっているから、キー口の言葉以外に確かめる方法なんて無かったけど、そんな疑問がわずかに浮かんた、

「ふざけるんじゃないわよ！」

その矢先だよ、妻が耳をつんざく様な声を上げたのは。僕は思わ

ず耳に手を当ててしまった。彼女に直ぐ横で叫ばれてみる、誰だつてそうするさ。キー口の方もぎゅうと目元を細めたが、そこは商売人だ、耳を塞ぐ事は無かったな。代わりに彼は、冷静な口調で、諭す様にこう尋ねた。

「ふざけるな、とはどう言う事でしようか？」

「私の夫が人形、という所よ。そんな訳無いじゃない、何年一緒だと思っでいて？ もし彼が……それが、というべきかしら？ 人で無かったら、とつくの昔に私が気付いているわ、間違いない」

対する妻は、憤懣やるかたないという感じで、鼻息も荒く、ここまで一気に捲くし立てた。どうにも僕が苦手とする感情的な態度だったね。実に、土舌人女性らしい、というべきか。

それから、多分その発言は、僕を心配して、というより、自分自身へ向けられたものだろう。何せ、もし僕が人形だったならば、彼女はずつとこれ……自分で言うのもおかしいがこれと暮らして来た事になる。その正体に気付きもせずに、ね。妻は自尊心が強いから、そんなのは決して許せなかったに違いない。

しかしながら、そのお蔭で僕も自身に対する疑問から解放された。彼女の言う事は正しい。僕達が結婚したから、五年も経っているのに、その間に僕が人形だなんて気付かない方がどうかしている……あれだけ悩んでおいて悪いがね、優柔不断な僕は、妻の言葉で、そう先の考えを翻したものだ。

所で、キー口はというとそれに動じた風は全く無く、あくまで平静を保ったままだった。口元には、変わらぬ笑みが宿っていてね、瞳には薄っすら哀れみすら感じられたな。そして彼は言った。まるで家庭教師がその生徒へ教える様な、親しげな口調で、

「ええ、そうでしょう。しかし、人形が人の形に似せて造られるならば、解らないのが普通なのです。また、それこそが私達の肝であります。簡単に気付かれてしまえば、意味などありませんから、人に見せる為にあらゆる精密技術が使われております、早々見破られはしませんよ……今回の検査だって、本当はもっと秘密裏に行いた

かったのですけどね、時間が押しているのだから仕方が無い」

彼は、奥さんには申し訳無いですが、と付け加えると、僕の方を見ながら仕事鞆を漁り出した。

僕は……嗚呼やっぱりな、と言われそうだが、キーロの言葉に唸っていたよ。それは確かに尤もだ、とね。この意志薄弱さもまたその証か、とまで考えた程だった。

そうこうしている間にキーロは数枚の紙束を取り出した。それを僕に差し向けて言った。

「まあ何を言っても詮無き事でしょう。私達も、御両親の契約書が無ければ見分け等最早付かないのですから。だから、まだご不満があるでしたら、こちらの方を是非お読みになれまして、」

だが、にこやかに微笑むより早くに、押し黙っていた、いや黙らされていた妻が動いた。俊敏極まりない動作で彼から書類を引つ手繰ると、そのまま暖炉の中へ投げ入れたのさ。勿論、火が灯っているね。男二人の意識が漸く追い付いた頃には、素晴らしい案配で煙が上がっていたものだよ。

「な、何をするんですか！」

キーロはここに来て初めて声を荒げたが、どうする事も出来ない。そんな彼に向かって、妻は高笑いを上げた後、

「これで契約書とやらは無くなったわ。貴方自身言っただけでは無くて？ 書類が無くては解らない、と。解る筈が無いわ、だって人形じゃないのだから。契約書ですって？ そんなもの、どうとでもでっち上げられるし、そうしたに決まっているわ。さあ、解ったかしら？ なら、さっさとお引取り願おうじゃない」

そう言い放った。手紙を焼き捨てた手前、僕は何も言えなかったけれど、あれは酷いと思うね、うん。確かに唯一の証拠が消えれば、証明も糞も無いのだが、ちよつとこれはやり過ぎだ。

案の定、キーロはかなり頭に來た様でね、妻に向かって語気強く言い返して來たのだが、

「……そんな事をされても、御主人が弊社の人形である事に変わり

はありません。外見の見分けは付かなくとも、中を見れば一目瞭然なのですから。何なら今ここで、御覧になっても良いのですよ」

その言葉に僕は心底驚いた。いや、僕が人形だとするならば出来て当然だが、生憎と、僕自身、どっちが正しいのか見当も付いてなくて心構えが出来てなかったんだ。仕事鞆から幾つもの工具を取り出して来た時は、背筋が凍り付いたのかと思っただよ。

だが妻とて負けてはいなかった。工具を取り出している最中の若い職人の腕をむんずと掴んで、

「無骨な道具を取り出して、うちの主人を切り裂きジャック見たくバラバラ死体にするつもり？ そんな事はさせないわよ、このキチガイ！ どうしてもやりたいって言うなら、本当にこの人が人形だって言う証拠を、今この場で直ぐに出して見なさいよ」

叫ぶ姿は男の様に勇ましくて、普段その矛先が向けられている僕は内心震え上がったんだが、同時に、それは無茶な、とも考えたね。だって、それを妻自身が処分したのだから。酷い矛盾だ。

その事は、当然キーロも解っていて、

「無理を言わないでください。契約書は貴方が焼いてしまったじゃないですか。その代わりに、現に証明しようと言っているのに、それにはさつき焼いた証拠が必要だなんて、おかしいじゃないですか」
そう言い返したんだが、聊か熱っぽくて荒々しい言葉だった。最初の慇懃な態度も、ここまで来ると完全に剥がれてしまっていて、端から見ていると、とても危なっかしい。まあ年齢から考えれば、それも妥当なんだがね、今回は相手が悪かった。頭に血が上った妻は、ちよつとやそつとじゃ折れはしないんだ。

「おかしく無いわ。おかしいのは貴方なんだから。証拠なんて、直ぐに出来るでしょ？ 適当にでっち上げたのだから。ほら、さつさと持って来なさいよ、ほらほらほら！」

で、青年の方も意地になっていたんだろうな。

「誰がおかしいですって？ そちらの方が余程おかしいですよ、奥さん。私の話をちゃんと聞いておりましたか？ だったら理解して

いる筈のように、頭の歯車でもすつ飛んでるのでは？ 嗚呼、どうせなら一緒に修理して差し上げましょう、無料でね！」

止せばいいのにこんな風に言っちゃったからさあ大変。後はもう売り言葉に買い言葉、問題の焦点は僕にある筈なんだが、気が付けば本人そっちのけでの大論戦、もとい、罵り合いに発展してしまっただ。どちらも興奮し切っていて、妥協というものを忘れていたから、それは凄まじい言葉の応酬が勃発した訳だ。

で、僕はその様子を最初からずっと見ていたんだが、途中で何もかもがどうでも良くなってしまった。

最初こそ自分が人間じゃないと言われて驚き、慌てたが、こうやって静かに振り返って見ると、別に人形だからって何か不都合がある事も無い。妻の、女としての誇りが傷付くかもしれないし、他にも問題が噴出するかもしれないが、そんな事は知った事じゃ無い。勿論それは逆も然り。結局、僕が何者であろうが、僕は僕に過ぎないのさ。何とかしてそいつを変えたいと願っても、絶対に逃れられない程に。

そう気付いた瞬間、僕は妻と青年との遣り取りが、口角泡を飛ばして罵詈雑言を吐き出すその様が、幼稚極まりないものに思えて、聞いているのも億劫になっちゃったんだね。

僕は脱兎の如く抜け出したよ。二人とも、相手の事ばかりに関心が向かっていて、僕が逃げた事に最後まで気付いていない様だったな。もしかしたら、まだ言い争っているのかも。全く、くだらない事だね。

と、ま、そんな訳で、僕はこの酒場という、最良の隠れ家までやって来たんだ。いやはや、何かあった時に駆け込むこころ、素敵なものは無いと僕は思っている、嗚呼、間違いない。そこへ更に旨い酒と肴が付いて、話を聞いてくれる相手が居れば、言う事は無しだ。うん、全く、長々と付き合ってくれて感謝するよ。麦酒^{ビール}一杯じゃ、割に合わないかもしれないが。

と……は？ それで結局僕は何者なのか、だって？ おいおいあ

んた、聞いてたんじゃないのか、僕の話。いや良いけどさ。本当、そんな事知りはないし解りもしないし、興味も無いんだよ、僕はどっちだって良い事なんだってば全く持ってさ、違うかい？

大体、言わせて貰えれば僕だって、あんたが何者か知らないんだよ。

何だって酒飲みにつき合ってくれてるのかとか……嗚呼、それは最初に聞いたか、失敬……じゃ、何だって熱心に話を聞いてくるのかとか、後は、そうだな、何故頭の天辺に発条ゼンマイを付けてるのか、とかな。

ああ……あんた……そうか、気付いてなかったのか、今まで……いや、そう慌てるなって。

やっぱり聞いてなかったな話。僕はどっちでもいいと言ったぜ。それに何が本当に良いのかも。

うん、いいじゃないか気にするな、そして呑もうよ兄弟！ 口煩い連中は放っておいてさ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7438f/>

人であるか 人でなしか

2010年10月8日15時07分発行